ジョン・ダンの『唄とソネット』について

——第1部「二人の小さな部屋」——

野　路　智　司

岡山理科大学工学部

(1994年9月30日　受理)

ジョン・ダンは不遇の三十代を耐え，1615年に聖職に就いた。説教壇に立った彼は独特の口調で聴衆の心を魅了しながら，6年後，ついにセントポール大聖堂の主任司祭にまで上り詰めたが，その彼も若い頃には恋する人であった。彼の死後に出版された『唄とソネット（*Songs and Sonets*)』に収められた詩を読むことによって，彼の恋愛観そして恋愛体験を垣間見ることが出来るのである。同時代きっての知識人である彼の描く恋愛の諸相は，ある意味では衒学的な哲学遊戯ともとられかねないが，実際，詩の語り手に耳を傾けていると，スコラ哲学から遠く離れた世界に生き，日常生活において魂と肉体の二元論などあまり意識することのない我々の恋愛体験とも，重なり合う部分があるように思えてならない。無論，それは恋愛という我々に普遍のテーマを扱っているからである。彼は「男性が女性に対して感じうるあらゆること，つまり軽蔑，自己嫌悪，苦悩，感覚的な喜び，相思相愛のもたらす平穏さや安心感を感じていた(“He had felt almost every thing a man can feel about a woman, scorn, self-contempt, angish, sensual delight, and the peace and security of mutual love.”)」のである[1)]。

恋愛のさなかにあって，我々の心は喜びと悲しみの間をいつも揺れ動いている。一瞬の出来事が我々を至福の世界へと導くことがある。そうかと思えば，突如として悲哀の淵へと突き落とされてしまうのだ。これはダンの詩においても同様であり，『唄とソネット』において彼の詩作の原動力となっているのは，不安そのものなのである。完全性の成就を目指すあまり，彼は自分の恋愛の行く末についていつも落ち着くことがないようだ。現在の二人が置かれた状況を理想化し，永久に維持しようとするあまり，詩の語り手は情緒不安定に苦しんでいるといってもよさそうだ。C. S. ルイスは「各々の詩行に感じられる詩人から読者へのこのような強迫観念，このような切迫感と圧迫感が，ダンの弱さと強さを生み出す源になっているようである（“This exacting quality, this urgence and pressure of the poet upon the reader in every in line seems to me to be the root of both of Donne's weakness and strength.”)」と述べている[2)]。さらに彼の不安の根源にまで迫ってゆくと，我々は恋愛詩というジャンルそのものに普遍的といえる一大テーマを提供している二つの言葉にたどり着く。恋愛の大敵，「変化」と「死」である。

> . . . Donne's love-poems take for their basic them the problem of the place of human love in a physical world dominated by *change* and *death*. The problem is broached in dozens of difficult ways, sometimes implicitly, sometimes explicitly, sometimes by asserting the immortality of love, sometimes by declaring the futility of love. Thus the *Songs and Sonets* hold within themselves *every conceivable attitude toward love threatened by change* (emphasis added).[3)]

恋愛の場における不安を解消すべく，ダンの心は理想と現実の間を絶えず揺れ動いている。そのような動きが，語り手の「変化に脅かされた恋愛に対して考えうるあらゆる態度」として，詩のなかに現れる。恋愛を巡り，可視と不可視，可知と不可知，現実の体験と想像上の体験との間を往来する意識の動きが表出されている，と言い換えることも可能であろう。恋愛そして女性に対して，語り手の反応の仕方は様々であり，相手の女性を理想化することもあれば，逆に誹ることもある。このような反応の引金となっているのは，「変化」への不安である。

本論は四部からなる予定であるが，その第一部を「二人の小さな部屋」と題し，今回はまず，ダンの機知を活かした不安解消法ともいえる恋愛の理想化の過程を，いくつかの詩を例にとって眺めてゆきたい。

1．二人の小さな部屋

ダンの恋愛詩に登場する恋人達は，二人の愛が生み出す空間の中に身を置く。そこは他のあらゆるものから隔離された地上唯一の平穏な場であり，恋人達は進んでそのなかに閉じ込もる。二人の愛の舞台となる空間は，ダンが詩のなかで用いている表現を借りれば，「変化」が支配する世界の他の部分と隔絶した「小さな部屋（“one little room”）」である。しかし、そこは何の変哲もない小部屋ではなく，ダンが機知を駆使して，二人の恋愛に意義を与えてゆく空間であり，世界のほんの一部にすぎない「小さな部屋」は，世界と等価，いやそれ以上の価値を備えた絶対的な空間となりうるのである。言葉のカーテン越しに詩のなかに描かれた二人の部屋をそっと覗いてみることにしよう。

冒頭に置かれた「お早う（“The Good-morrow”）」には，ダンの不安癖とは打って変わり，平穏無事な二人の姿が描かれている。語り手の口調にも自信が漲っているではないか。

> And now good-morrow to our waking souls,
> Which watch not one another out of fear;
> For Love, all love of other sights controls,
> And makes one little room, an everywhere.
> Let sea-discoverers to new worlds have gone,
> Let maps to others, worlds on worlds have shown,
> Let us possess one world, each hath one, and is one.

My face in thine eye, thine in mine appears,
And true plain hearts do in the faces rest;
Where can we find two better hemisphers,
Without sharp North,without declining West ?
Whatever dies was not mix'd equally;
If our two loves be one, or, thou and I
Love so alike, that none do slacken, none can die. (sts. 2—3) [4)]

さあお早う　僕達の目覚める魂
心配事もなく互いを見つめ合っている
愛というものはその他一切のものへの目移りを抑え
一つの小さな部屋を全世界にしてしまうんだ
海に出て発見をしようする者など新世界へ行ってしまえばいい
次々と世界を映し出してゆく地図など他人様のもの
僕達はそれぞれが一つの世界　あわせて一つなんだから一つの世界を所有しよう

僕の顔が君の瞳に　君の顔が僕の瞳に映る
二人の顔には偽りのない純粋なそれぞれの心が宿る
気候の厳しい北という方角も　日の沈む西という方角もなく
これほどすばらしい二つの半球をどこに見つけることができるだろうか
滅びるものはすべて等しく混り合っていなかったからだ
僕達の二人の思いが一つとなり　僕と君が何物にも怯まぬ程等しく愛し合えば
滅びるものは何一つとしてないんだ

ここには小宇宙と大宇宙の概念が巧みに使われている。当時，人間は一人一人が小宇宙を具現するものとして考えられ，小宇宙は人間や他の生物が置かれている世界である大宇宙と対照を成すものであった。男女は「それぞれが一つの世界」であり，恋愛を対象とするのは，二人を取り囲む周辺の大宇宙ではなく，もっぱら相手自身が備えている内的な世界，小宇宙である。地理上の発見を重ねる度に外的な世界を拡張し，「死」と「変化」が支配する領土を広げて行くのは航海者達の仕事である。それとは逆に，二人の関心はそれぞれの小宇宙に収斂してゆく。さらに二人の小宇宙を一つにすれば,「一つの世界を所有する」ことになるのだ。ここで両宇宙の逆転が生じる。恋愛によって「一つの小さな部屋」が「全世界」に変わる。こうして恋人達は安心してそのなかに留まることが出来るのである。

この逆転作用は，相手の瞳を覗き込み，そこに映った自分の顔を確認することによっても促される。二人の知覚対象は相手の瞳に映った自分の姿にのみ限定されるからである。それだけではない，語り手は眼球に注目する。地球も眼球も球形をしている。両者を重ね併せて，さらに二人の絆を強固にするのである。互いの顔を映し出すそれぞれの眼球を二

つの半球として組み合わせれば，球が出現する。日々の「変化」に満ちた大宇宙，地球に対し，外界から隔離された空間で作られるもう一方の球は，「変化」とは無縁であり，「厳寒の北国も太陽の没する西方もない」二人の小宇宙が築き上げる世界なのだ。

球を完全性の象徴とする当時の考えを援用するまでもなく，二人の眼球が作り出す球体は二人の愛を象徴して余りある。確かに球はどこから見ても同じ形であるからだ。半球に分離しない限り，二人の眼球が作り上げる球は，「変化」という細菌を完全に外界から締め出しているのだ。

なおも用心深く，ダンの語り手は言葉を続ける。スコラ哲学の原理によれば，物質の腐敗や活力の衰退の原因は，その物質を構成している元素にある。異質な元素により物質が構成されていたり，種々の元素が均質に混り合っていない場合，その物質は最終的に消滅してゆくのである。ところが，二人の恋愛の行く手には消滅の恐怖はない。というのも，二人は「等しく混り合って」いるからなのである。語り手は勝ち誇ったように，「僕達二人の気持が一つになれば」，つまり，「僕と君が何物にも怯まぬほど本当に等しく愛し合えば，滅びるものはひとつもない」と断言する。

当然，二人の思いの等しさを一流の知識で強化してゆく語り手は，「変化」の相対性を念頭に置いている。外界から完全に隔離された部屋で，絶対性を確立すべく，互いの姿を凝視する恋人達は互いの視覚の中に相手の姿ばかりでなく，相手の思いをも遮閉することになる。ベッドフォード侯爵夫人へのオマージュとして書かれた「トウイックナム庭園（"Twickenham Garden"）」のなかに，「ああ，心は瞳に輝かず（Alas, hearts do not in eyes shine, (1.23)」と記されているように，実は瞳と心の間には密接な関係が存在するのである[5]。この関係は「肖像による魔術（"Witchcraft by a Picture"）」にも見られる。この詩では，語り手が涙をさめざめと流しながら，別れを嘆く女性を慰めている。女性の瞳に映る語り手の姿は涙に流れてしまっているが，もう一つの心の瞳には語り手の姿が宿っている。

Though thou retain of me
One picture more, yet that will be,
Being in thine own heart, from all malice free (11. 12—14) [6]

僕の名残を留めるもう一つの肖像を
君がまだ持っていられるにせよ
それは君自身の心の中にあるからどんな悪意にも曝されることなどない

さらに「落担（"The Damp"）」にも「君の姿を僕の心に見つけた時は（"When they shall find your picture in my heart, "(1. 4)」とあるように，瞳は心と姿を結ぶ経路になる[7]。ダンにとって，凝視は相手の瞳の中に映る自己の姿を通して，相手の心の中にも自己の姿が存在すること確認する凝思でもあったのだ。

「お早う」のなかで知的遊戯のなかに恋愛の瞬間を定位しようとするダンの企てはこれ

だけではない。これまでの策略はもっぱら共時的なものであった。実は，第一連において，彼は既に過去を語ることによって，通時的な側面からも，バリケードを張っている。語り手はこの世で彼女を愛するように運命づけられていた。

I wonder, by my troth, what thou and I
Did, till we lov'd; were we not weaned till then ?
But suck'd on country pleasures, childishly ?
Or snorted we in the Seven Sleepers' den ?
'T was so; but this, all pleasures fancies be.
If ever any beauty I did see,
Which I denir'd, and got, 'twas but a dream of thee.　(st. 1)

愛し合うまで僕達は一体何をしていたんだろう
その時まで僕達はまだ乳離れもしていなかったのだろうか
何も知らずに田舎じみた喜びを吸ってたのだろうか
それとも七人の貴公子が眠りこけた洞窟でいびきでもかいていたのだろうか
確かにその通りだった　この出会いを除いた全ての喜びは気まぐれにすぎない
これまで僕がお目にかかり，求めて，手にいれた美人がいたとしても
それは君の幻にすぎなかった

この世に生まれて以来，二人の魂は互いのパートナーを捜し求めてきた。二人の魂の目覚めとは，この劇的な出会いが到来し，真の恋愛に目覚めたことを意味していたのだ。誇張した表現に加え，ダンは疑問文を冒頭に三つ配し，この瞬間によって，いかに人生が前後で大きく転換するかを見事に描き出し，野卑な「田舎の喜び」から洗練されたオトナの愛へと語り手が歩み始める記念すべき瞬間を讃えているのだ。この目覚めの瞬間を表現するにあたって，ダンは音声効果をも巧みに用いている。第四行以降を音読すれば，その効果は一目瞭然である。眠りの静けさを表す第四行の［s］の連続とは対照的に，第六から第七行は，頭韻をも含め，［e］，［i］，［i:］等の母音を巧みに絡めた詩行になっており，堂々と愛を宣言している。

果して恋の行く末の不安は，解消できるのだろうか。「お早う」では確かに二人の過去と現在を語り，未来についても球へのアナロジーとスコラ哲学の知によってバリケードを張ったのであるが，やはり未来への不安を払拭することは困難である。現在と未来の狭間に存在し，絶えず「変化」に曝される人間の無力さを嘆く語り手の姿が，「唄：愛しい君，僕は行かないよ（"Song: Sweetest love, I do not go"）」にみられる。

O how feeble is man's power,
　That if good fortune fall,
Cannot add another hour,

Nor a lost hour recall ! (11. 17—20)[8]

ああ　人の力とはなんと弱いものなのか
幸運が降り掛かっても
時間を引き延ばすこともできないし
なくしてきた時間を呼び戻すこともできないのだ

予想し難い未来，自分にいつ訪れるかもわからぬ「変化」と「死」を，確かにダンは恐れている。可視物，そのなかでもとりわけ恋人の姿が彼には不可欠であった。なぜなら眼前に彼女の存在があってこそ，恋愛が可能になるからだ。そして恋愛のなかで不安と格闘しながら，彼は巧みなロジックを用いて，不変の世界への扉を叩く。永遠の鍵を握る不可視の対象を可視物へと自分の意識上で変換することによって，自己の恋愛さらには自己の存在そのものも永遠化しようと努めるのである。そこには大胆な飛躍が生じることもある。スタインは，「肉体という第一の世界から心の世界へ，ついで魂の世界へと向かう運動(“a movement from the first world of flesh to that of mind and thence to a world of spirit”)」を読み取っているが，ダンの用いるロジックは時としてこの運動の方向に可逆性を認めているという点も付け加えておいてよいだろう[9]。

典型的な「小さな部屋」の一例をさらに眺めて見たい。他の世界と隔絶されたところで，ダンの描く恋人達が絶対的な二人の時間と空間を確立しようとしていることは，指摘済みである。「夜明け（“The Sun Rising”)」では，語り手は横柄とも思える態度で，朝を迎えた二人の邪魔をする太陽に向かって話しかける。

Busy old fool, unruly sun,
Why dost thou thus,
Through windows, and through curtains, call on us ?
Must thy emotions lovers' seasons run ? (11. 1—4)[10]

せわしく動き回る愚かで我がままな太陽よ
どうしてわざわざこんな風に
窓やカーテン越しに僕達を訪ねて来るのだ
おまえの心の動きが恋の季節を動かしているとでも

昼と夜を規定する太陽が支配する時間の流れは，「変化」に満ち，生の有限性を絶えず生きる者の意識に刻み込む。ところが，二人の部屋に流れているのは，愛が創り出す時間であり，その愛が続く限り，それは「変化」なく，無限性に向かって流れてゆくはずである。「形見(“The Legacy”)」の語り手の言葉を借りれば，「恋人達の時間は永遠そのもの(“And lovers' hours be full of eternity (1. 4)”」なのである[11]。この詩のなかでも，第一スタンザの最終二行には，真の愛の永遠性を肯定するダンの主張が見られる。

Love, all alike, no season knows, nor clime,
Nor hours, days, months, which are rags of time. (11. 9—10)

愛はいつでも変わらず季節の移りも天候の変化も
時間の切れ端にずぎない時刻や日や月の変転も知らないのだ

ダンのいう理想的な恋愛の形とはどんなものなのだろうか。「お早う」で語られていた男女が互いに寄せ合う思いの均質性は当然として，「プラトン的恋愛（"Platonic Love"）」という異題を持ち併せた「大事業（"The Undertaking"）」のなかで，語り手が説くところに傾けてみよう。彼は世間の恋の在り方を嘆き，自説を説いている。

But he who loveliness within
  Hath found, all outward loathes,
For he who colour loves, and skin,
  Loves but her oldest clothes.

If, as I have, you also do
  Virtue attir'd in woman see,
And dare love that, and say so too,
  And forget the He and She;

And if this love, though placed so,
  From profane men you hide,
Which will no faith on this bestow,
  Or, if they do, deride: (sts. 4—6)[12]

女性の心に愛らしさを見つけた者は
外見などただ忌み嫌うだけ
色つやや肌の色を愛する者は
女性の古びた衣を愛しているのだから

僕がしてきたように
女性という姿を纏った美徳を目にし
敢えてその美徳を愛し　愛しているとも言い
男性と女性の性を忘れるならば

さらに俗人どもの手には届かないところにあるにせよ
全く信じようとせず
信じても嘲笑するだけのその俗人どもに
この愛を隠しておけば

簡単に言えば，彼が主張しているのは，現象界に存在する女性という形象そのものではなく，その形象のうちに宿る美徳へと至るべく，「古びた着物」である肉体を超越した魂の世界へ目を向け，イデアの世界にまで認識を深める恋愛なのである。引用箇所はダンが信じる真の恋愛に触れる条件だけを述べている部分にすぎない。後に続く帰結部で，これを実践する者は，歴史に名を留める諸々の聖人達や賢人達よりも立派なことを行っており，その上，立派なことを他人に隠しておくという美徳をも持ち併せていることになるとして，機知を働かせている点が誠にダンらしい。これでダンがネオプラトニズムの洗礼を受けていることも明確になった。

再び，二人の寝室へ戻ろう。やはり寝室に差し込んでくる太陽光は，恋の障害として二人の前に立ちはだかることはない。瞬き一つで目の前から消えてしまうからである。但し，永遠性への鍵を握り，肉体から魂への経路となる「彼女の姿」の消失に，ダンの語り手が耐えられないことは，承知済みだ。彼女をいつまでも一心に見つめる語り手がここに存在する。

Thy beams, so reverned and strong
Why shouldst thou think ?
I could eclipse and cloud them with a wink.
But that I would not lost her sigh so long. (11. 11—14)

自分の光が本当に人に崇められ
強力だなどと思ってでもいるのかい
彼女の姿を一刻たりとも失わないでもすむなら
そんな光など瞬き一度で暗くして　曇らせてやれるのだ

続く詩行で「彼女の瞳でおまえの目が眩まなかったら（“If her eyes have not blinded thine” (1. 15)）」と前置きしているように，語り手にとって彼女の価値は太陽を上回るどころか，彼女そのものが完全に太陽にとって替わり，何者も引き裂くことのできない二人の絆への確信は，ますます強いものになってゆく。“reverned” や“strong” といった形容は，太陽ではなく彼女にこそふさわしいのである。知的遊戯のなかで価値の逆転は止まるところを知らない。寝室が全世界，寝室に流れる時間が全世界を支配する客観的時間へと，ダイナミックに逆転する。まず，寝室が全世界に替わってゆく。

. . . , All here in one bed lay.
She's all States, and all Princes I,
Nothing else is. (11. 20—22)

全てがここ一つのベッドのなかにある
彼女がすべての国家であり，その国家をすべて治めるのが僕

他には何も存在しない

この世界には二人の恋人だけが存在する。彼女が世界を構成するあらゆる国家であるとすれば，彼はその一つ一つの国家を統べる王侯である。もちろん彼が君臨できるのは，愛という権力を手にしているからである。二人の置かれている寝室以外の空間は，単なる「時の断片」に支配されているにすぎない。無論，その中心は二人が横たわるベッドである。語り手は得意満面に「変化」の源となる太陽に最終通告を行う。

Thou, sun art half as happy as we,
In that the world's contracted thus;
Thine age asks ease, and since thy duties be
To warm the world, that's done in warming us.
Shine here to us, and thou art everywhere;
This bed thy center is, these walls, thy shpere.　(11. 25—30)

太陽よ　世界がこんなふうに縮まったのだから
おまえの幸せは僕達の半分だ
老けたのだから楽をすればよい
おまえの務めは世の中を暖めることだから僕達を暖めておけばよい
おまえの光を僕達に向ければ全世界に向けてることになるんだよ
このベッドがおまえの中心　四方の壁がおまえの天球だ

プトレマイオスによれば，地球が宇宙の中心にあり，その周りをいくつかの天球が回転していた。太陽は地球から四番目の天球に属していた。この壮大な天球対地球との関係が，いともたやすく，二人の寝室の壁対ベッドと取って替わる。「お早う」にあるように，「愛というものはその他の一切のものへの目移りを抑え，一つの小さな部屋を全世界にしてしまう」ことが，ここでも改めて確認できるのである。

「小さな部屋」のなかは，語り手の一流の知によってしっかり守られ，「変化」が忍び込む隙間など全くないようだ。だが，人間の運命である「死」に際して，恋人達はどうなってしまうのだろうか。二人の愛が一年続いたことを祝福する「一周年記念（"The Anniversary"）」を第一部の最後を締めくくる作品として扱いたい。

Only our love hath no decay;
This, no tomorrow hath, not yesterday;
Running it never runs from us away,
But truly keeps his first, last, everlasting day.　(11. 7—10)[13]

僕達の愛だけが衰退とは無縁だ
明日もないし　昨日もないのだ

僕達の愛は動きながらも　僕達から決して離れてゆくこともなく
いつまでもその最初で最後そして永久に続く日を留めている

二人の愛だけが「衰退」とは無縁なのであって，逆説的ではあるが，二人の愛の時間は，出会いから，死，さらに死を越えた魂の段階まで流れながらも，停止しているのである。とはいえ，死によって二人が引き裂かれ，互いの肉体と離別する運命にあることは，事実であり否定できない。

Alas as well as other Princes, we
(Who Prince enough in one another be)
Must leave at last in death, these eyes, and ears,
Oft fed with true oaths, and with sweet salt tears;　(11. 13—16)

ほかの王達と同じように
(互いの王である僕達だって)
結局のところ死に臨んでは甘くもしょっぱい涙をよくこぼしたこの瞳や真の
誓いをよく聞いたこの耳とも別れねばならない

二人の肉体，中でも互いの声を通して誓いを捧げ合った耳，互いの姿を確め合いながら，涙を貯めた互いの瞳とも別れることになる。だが，ここで「大事業」のなかの表現を思い出してみよう。肉体は魂が纏う「古びた衣」にすぎないのである。死とは肉体の衣を脱ぎ捨て，魂の状態へと還ることである。

But souls where nothing dwells but love
(All other thoughts being inmates)　then shall prove
This, or a love increased there above,
When bodies to their graves, souls from their graves remove.
(11. 17—20)

しかしただ愛のみが宿る魂は
(愛以外の全ての思想はその同居人)
肉体が墓へと入り　魂が墓から出てゆく時
僕達の愛は衰えず　天上でもますます強まることを証明してくれるだろう

死を迎え，二つの魂へと還った後もなお愛の勢いは衰えを知らない。それどころか「ただ愛のみが宿る魂」は絆を一層，強めることになるからだ。死とはまさに霊なる愛の出発点，永遠性へと続く入口に他ならない。霊肉にわたる愛の両面性を盾に取って，ダンは愛を永遠化し，かつ理想化しているのである。ロジックの上では，「衰退」も「死」も超克できた。

ところが，現実に目を戻すと，二人がいるのは，「変化」に支配される地上の世界なので

ある。そこではどうなのだろうか。

Here upon earth, we're Kings, and none but we
Can be such Kings, nor of such subjects be;
Who is so safe as we, where none can do
Treason to us, except one of us two ?　(11. 23—6)

ここ地上では僕達は王様だ
これほどの王になり　これほどの臣民を統べる者は僕達をおいて他にはない
僕達ほど安泰なものがいるだろうか
僕達二人のどちらか以外に誰も裏切るものはいないのだから

「夜明け」では相手の女性が国家で，自分が王であると語り手が述べていたが，ここでは限定は行われていない。一方が王となり，他方がその臣民となるだけである。地上にあっても，やはり二人は愛の王国を統治する王である。王国への喩えは，二人だけが統べる「小さな部屋」の変奏ともいえるだろう。しかし，見方を変えれば，この詩行には愛の不変性と永遠性を巡るダンの不安感が表れていることも明かである。この引用箇所に続く行で，彼は「真実への懸念も，不実への懸念も慎もう（"True and false fears let us refrain," (1. 27)」と述べているが，マルツは「不実への懸念とは互いにいつまでも不実であるという懸念であるが，真実への懸念とは死を免れない二人の愛が実際に必滅の運命に従属しているという懸念（"The false fear is fear that they will ever be unture to one another, but the true fear is that their mortal love is indeed subject to mortality"）」と解釈している[14]。つまり，語り手は，地上では必ず愛が受けることになる「変化」と「死」という二大試練を意識し，その不安を打ち消すべく，言葉を語っているのである。最後に，彼はこの両懸念を克服するかのように，新たな二周年目への出発を誓う。

Let us love nobly, and live add again
Years and years unto years, till we attain
To write threecore; this is the second of our reign.　(11. 28—30)

気高く愛し合い　共に生き
さらに何年も何年も積み重ね　六十周年を迎えよう
僕達の治世の二年目がやって来た

かくして我々は愛が創り出す「小さな部屋」を眺めてきた。そこは二人以外の何物からも切り離された場所である。二人はこの空間に閉じ込もり，ただ互いの姿だけを眺め，互いの声だけに耳を傾け，現在の愛を確認し，永遠へと向かうべく，世間から隠遁する。『唄とソネット』中の詩編に関して，レッドパスが「二人の恋人は互いに自らで事足れりとしているのが，もう一つの典型的な考え方である（"Another typical thought is that two lovers

are self-sufficient.")」とし，さらにダンがこの考えを時として誇張し，「一緒になって，二人が全世界であると断言する（". . . and asserts that together they are the whole world.")」と，全世界と等価，いやそれ以上の意義を有する二人の愛の空間について述べているのももっともである[15]。

ダンは霊肉両面に及ぶ真の愛が不滅であることを肯定している。ならば，ダンの描く恋人達は「衰退」や「変化」や「死」とは無縁であってよいはずだ。だが，このような理想的な恋愛観を信じているからこそ，現実の世界に存在する「変化」や「死」をいっそう意識することになり，彼は強い不安感にも苛まれていたのではないか。得意満面に真の愛を説きながらも，一方では愛を強化する様々な思考に没頭していた。現在と不可知の未来の狭間にあって，彼はそのような思考から得られた着想によって不安に打ち勝とうとしていたのである。ダンは「風刺詩だけでなく，本来，人のありのままの姿が描かれるべき恋愛詩のなかでも形而上学を気取る。そうして，本来なら女性の心を捉え，柔和な愛の思いで女性を楽しませるべき場合に，見事な哲学的見解で女性の頭を悩ませる（"He affects the metaphysics, not only in his satires, but in amorous verses, where nature only should reign; and perplex the minds of the fair sex with nice speculations of philosophy, when he should engage their hearts, and entertain them with the softnesses of love."」とドライデンが述べたことからも分かるように，彼の恋愛詩は当時としても風変わりだった[16]。しかし，恋愛の不安を解消するために，様々な着想を詩の中にふんだんに散りばめたところにダンのダンたるゆえんがあるのではなかろうか。思考から生まれてくる様々な着想に，彼の機知は形を授ける。その考えは現実の世界のみならず，想像上の世界を自由自在に動き回り，最終的に言葉で構築された「小さな部屋」となる。その中で一時的にせよ，彼の不安は鎮められるのである。

Notes

1) Joan Bennet,"The Love Poetry of John Donne — A Reply to Mr. C. S. Lewis," in *Seventeenth Century Studies Presented to Sir Herbert Grierson,* 1938 ed. (Oxford : Clarendon, 1938), pp. 85—104 ; rpt. in *John Donne's Poetry : Authoritative Texts Criticism,* ed. A. L. Clements (New York : Norton, 1966), p. 160.

2) C. S. Lewis, "Donne and Metaphysical Poetry," in *Seventeenth Century Studies Presented to Sir Herbert Grierson,* 1938 ed. (Oxford : Clarendon, 1938), pp. 64—84 ; rpt. in Clements, p. 122.

3) Louis Marts, "John Donne : Love's Philosophy," in *The Wit of Love* (Notre Dame, Ind. : Univ. of Notre Dame Press, 1969) ; rpt. in *Songs and Sonets : A Selection of Critical Essays,* ed. Julain Lovelock (1973 ; rpt. London : Macmillan, 1979), p. 169.

4) Theodore Redpath, Introd., *The Songs and Sonets of John Donne,* 2nd ed. (London : Metuhen, 1983 ; rep. Cambridge : University Paperback, 1987), p. 227.
他の詩の引用もすべてこの書物による。引用箇所には詩の記載されているページのみを記す。詩の解釈については上記のテキストに附された注のみならず，以下の書物を主として参考にした。
河村錠一郎訳，『エレジー・唄とソネット』（東京：現代思想社，1977）

松浦嘉一編注, *Select Poems of John Donne* (東京：研究社, 1980).

5) p. 273.

6) p. 156.

7) p. 153.

8) p. 257.

9) Arnole Stein, *John Donne's Lyrics : The Eloquence of Action* (Minneapolis : Univ. of Minnesota Press, 1962), p. 66.

10) p. 232.

11) p. 114.

12) pp. 289—290.

13) p. 210.

14) Martz, p. 178.

15) Theodore Redpath, *The Songs and Sonets of John Donne,* 1st. ed. (London : Methuen, 1956), p. XXXV.

16) John Dryden, *A Discourse Concerning the Original and Progress of Satire* (1963) : rpt. in Clements, p. 106.

John Donne's *Songs and Sonets*

Part 1 "One Little Room for Two"

Satoshi NOJI
Okayama University of Scince,
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan
(Received September 30, 1994)

John Donne had gone through hardships in his thirties before he got ordained in 1615, finally becoming Dean of St. Paul's. In his younger days, however, he might have had some experiences of love, on which he wrote many poems. After his death, those poems were published as *Songs and Sonets,* in which he shows various aspects of love.

As C. S. Lewis points out, by taking "every conceivable attitude toward love threatened by change," how to stabilize the very present state of love, or how to immortalize love itself in the world dominated by changes, is what Donne seems to be mostly concerned with. Adopting many ideas in the poems, the narrator, a mask of the poet himself, makes efforts to dispel every seed of anxiety about his love in the time and space where he and his beloved are put.

In this series of essay, I intend to deal with *Songs and Sonets,* hoping to introduce Donne's characteristic reactions to love mainly through reading his poems. In Part 1, particularly, I will focus on seeing the way Donne overcomes possible changes and death in love experiences with his own wit.